九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『政治研究』第50号に寄せて

谷川，榮彦
県立長崎シーボルト大学学長，九州大学名誉教授

安部，博純
北九州市立大学名誉教授，福岡県立大学名誉教授

徳本，正彦
九州大学名誉教授，姫路獨協大学名誉教授

小山，勉
福岡大学法学部教授，九州大学名誉教授

https://doi.org/10.15017/16420

出版情報：政治研究. 50, pp.1-10, 2003-03-31. 九州大学法学部政治研究室
バージョン：
権利関係：

『政治研究』第五〇号に寄せて

『政治研究』の創刊に参加して

谷川榮彦

『政治研究』発行五〇年、ご同慶の至りです。創刊当初は世に言う「三号雑誌」の懸念もなきにしもあらずでしたが、よくも半世紀も続いたものと改めて感心しております。これはひとえに政治研究会歴代メンバーのたゆまぬ研鑽と本誌発行へのなみなみならぬ努力、それに九大法学部の継続的支援等のおかげであり、関係各位に深甚の敬意を表します。

『政治研究』は九大法学部研究室によって、二つの目的のもとに創刊されました。その一つは、第二次世界大戦前・戦中の日本軍国主義による国民の権利自由の抑圧やアジア諸国への侵略・戦争行為、そして、それらを阻止しえなかったわが国政治学研究に対する真摯な反省の上に立ち、戦後日本の民主化促進と世界平和達成を目指した新しい政治学体系樹立の要望に応える、というものでした。もう一つは、若い研究室メンバーの成果発表の場としての役割を持たせ、かれらの登竜門にしようという意気込みでした。

こうした研究・出版活動開始の時代的背景として、日本の敗戦直後から朝鮮戦争（一九五〇～五三年）にかけて大きく激動した内外情勢が思い出されます。国民は敗戦後の経済的窮乏、社会的混乱や連合国軍の占領下にもかかわらず、新生日本の建設に向かって躍動し、労働運動や学生運動等もその一環において年々盛り上がる一方でした。しかし他方

では、大戦終結直後の一九四七年ごろからヨーロッパで始まった米ソ冷戦が米軍の日本占領政策にも深刻な影響を及ぼし、我が国の民主化や平和路線に対する逆コースが始まりました。しかも、朝鮮戦争の反動がそれに拍車をかけるという危機的な情勢にありました。

『政治研究』の創刊はまさにこのような内外情勢激変のさなかでしたが、その担い手となったのは、九大法学部学生時代に各演習（ゼミ）やそれを基礎とした「政治研究会」「国際政治研究会」等において、また学生運動の経験から、研究のおもしろさや重要性に目覚め、卒業後大学院生（旧制）や助手として政治研究室に参加した面々でした。国際政治研究会に係わっていた私も、院生として加わりました。政治研究室というのは大学の制度としては存在しませんでしたが、政治学関係講座の各教官とわれわれとで始めた政治研究会と同義語的に使い、『政治研究』の発行元としても使うことにしました。

当時九大法学部の政治学関係講座は戦前からの二講座しかなく、政治学・政治学史講座は今中次麿教授と竹原良文専任講師、政治史・外交史講座は具島兼三郎教授がそれぞれ担当し、後に講座化する国際政治学の講義には、名古屋大学の信夫清三郎教授が非常勤講師でお見えでした。また、教養部の政治学担当は嶋崎譲専任講師でした。こうした教官はいずれも今中先生の教え子で、先生は戦時中に朝日新聞社から刊行した教科書『政治学』が軍部の反感を買って九大を追われ、戦後復学されたところでした。具島先生は戦時中の満鉄時代における反ファッショ的・反戦的言動が関東軍の逆鱗に触れ、三年間「満州」の牢獄に呻吟されたし、信夫先生も著書が治安維持法に抵触し、一時拘留の憂き目に遭われた経験をお持ちでした。どなたも権力におもねらない反骨精神旺盛な方々で、年々その先生方を慕った多くの学生が政治研究室に入り、そこの学風を築いていきました。

当時は政治研究室での研究成果を世に問おうにも発表場所などほとんどなく、さりとて厳しいインフレ経済の下では教官その他研究室メンバーの会費だけでは、研究誌の出版など無理なことでした。しかし幸いにも、法学部法政学会の機関誌『法政研究』の印刷を引き受けていた「株式会社　中越印刷」に頼み込んで、超破格の費用で印刷してもらい、『政治研究』の出版に漕ぎ着けることができました。それは、中越印刷の社長と同郷の出身であった法学部の高田源清

教授の肝煎りがあってのことでした。商法講座担当の高田教授は、政治研究室の大勢とはイデオロギー的に対極にあってわれわれをよく批判されていたが、それはそれとして私どものために一肌抜いていただいたことがまことにありがたく、印象的です。

こうして『政治研究』は日の目を見たわけですが、その後一九七〇年代に入ってでしょうか、『法政研究』の印刷所の変更に伴い本誌への〝特典〟もなくなり、出版の危機に陥りました。しかし、法学部が出版部数の半分を全国大学図書館への寄贈用に買い上げる措置をとってくれましたので、財政的にその後の存続が保障されることになりました。

それはともあれ、『政治研究』の創刊に参加して、一九八九年に退官するまで三五年余りにわたって同誌に直接的、間接的に係わってきた私ですが、いまこうして五〇年前の思い出を文字にしようとすれば、断片的で不正確な印象ばかりが浮かんできます。記憶違いもあるかもしれませんが、七七歳の老齢に免じてお許しください。紙数の関係で、当時の研究会の熱気溢れる討論など紹介できないのが残念です。

最後に、九大政治研究会と『政治研究』が二一世紀の複雑多様化する学問的課題を的確に捉えて研鑽を積み、ますます発展されることを祈念いたします。

『政治研究』第五〇号の記念に寄せて

安部博純

九州大学政治研究会と雑誌『政治研究』の思い出を綴るとなると時代をかなり遡る必要がある。それもひと昔やふた昔の話ではなく実に半世紀も昔の話である。「追憶」作業も容易ではない。そこで記憶を辿る「よすが」を求めて、書斎の隅で埃をかぶっていたダンボールをひっくり返してみた。すると古雑誌や古新聞に混じって一桁ナンバーの『政治研究』や五十年代の『九州大学新聞』、おまけに原稿の束まで出てきた。黄ばんだ頁をめくっているうちに半世紀も昔の思い出が少しずつ甦ってきた。

私は、朝鮮戦争のはじまった一九五〇年に九州大学に入学し三年で修了した旧制最後の卒業生である。在学中の怠慢がたたって、卒業が近づくにつれて大学への未練が強まり、いまでいうモラトリアム人間になった。しかし、噛るべき脛もない貧乏学生のこと「自主的留年」などと優雅なことはできない。仕方なく二、三の企業に願書を出したが気乗りがせず、二次試験をすっぽかす始末。まもなく卒業式を迎え否応なしに社会人になったが、いまでいうフリーターのような生活をしながら身の振り方を考えること一年余り、ようやくえた結論が大学院進学であった。意を決して具島兼三郎教授の門を叩いたのが一九五四年六月のことである。フリーターから一転して大学院生（旧制）となった私は、しばらくの間は、指導教官の助言に従ってカード作りに勵んだ。新聞の縮刷版から目ぼしい記事を拾ってカードに書き込むという単純な作業である。それでも私は学園に復帰できただけで幸せであった。カード作りがほぼ終ると、これをもとに原稿を仕上げる作業に移った。数か月にわたる悪戦苦闘の末に書き上げたのが処女論文「戦後日本におけるファシズム」（四〇〇字詰め二二五枚）である。このテーマは、一九五二・三年頃論壇を賑わしたネオ・ファシズム論の影響を受けたものと思われる。当時はアメリカにおけるファシズム体制の成立を説く性急な議論も現われたりし

たが、わが処女論文も鳩山内閣（一九五四―五六）を第一次近衛内閣やブリューニング内閣に照応する「前ファシズム」と規定するほど短絡的であった。

記録によると、私がはじめて政治研究会に出席したのは大学院に籍をおいてから二年ほど経った一九五六年六月のことである。誘ってくれたのが特研生の岡本宏氏ではなかったかと思うが、いまとなっては確かめる術もない。痛恨の極みである。その年十一月の研究会では、「日本ファシズムの構造的特質―天皇制ファシズム」と題して報告をおこなっている。なにしろはじめての研究報告、随分緊張したことと思うが、当日のことはなぜか全く記憶にない。

私の初めての活字論文「日本ファシズム組織の矛盾と特質」は『政治研究』第五号（一九五七年二月）に掲載してもらった。研究会での報告を基にして書き上げた稚拙なものであるが、この論文はいろいろな意味で私の人生を決定づけた。なによりもこの論文によって研究者への道を歩む決心がついた。もともと大学院入学はモラトリアムの手段にすぎずはじめから研究者になろうと思っていたわけではなかった。処女論文は全く不出来で、研究者としての素質はないことが明白となった。この辺で転進を図るべきではないか。現に同期の院生が大学を去った。お前も続け。去就について煩悶しているうちに活字論文が出来上り、曲がりなりにも研究者街道の道中手形を手にすることになった。すると妙なもので、腹を括るというか、ある種の覚悟ができた。それに、折りからのミッチー・ブームにあやかって、『九大新聞』や学園総合誌『展望』などで戦後天皇制を論じて文章表現の魅力に取り憑かれた。このあと予想以上に長い「就職難」が続いたが、院生から研究生へと「身分」を変えながら、経済的には私塾経営で持久体制を構築し長期戦を耐えることができた。

第一論文は、進路ばかりでなく私の専門領域まで規定した。私はこのあと『政治研究』にはさまざまなテーマで投稿した。「戦争と平和の論理」（第九号、一九六〇年九月）、「国家分類に関する若干の問題」（第一〇・一一合併号、一九六三年三月）、「戦後日本のナショナリズム」（第十五号、一九六七年三月）などである。多様な分野に関心をもっていたことがわかる。しかし、その後の研究の軌跡を振り返ってみると、ひたすら第一論文が設定した路線を辿ってきたように思う。十数年後、私は研究行路の一里塚として文字通りの拙著を刊行したが、そのタイトルが『日本ファシズム研究序説』（未来社、一九七五年）であった。当初、その稚拙さのゆえに収録を躊躇した第一論文も結局収録することにしたが、出来上がってみると結構さまになっているのに驚いた。

ともあれ、わが青春の道標である『政治研究』が第五〇号という一つの節目を迎えるという。まことに大慶の至りである。

私の助手時代

徳本正彦

私は一九五三（昭和二八）年三月に、新制九州大学の第一回生として法学部（政治専攻）を卒業し、同年四月に九州大学法学部助手に採用された。同期の者の中では手島孝氏と私だけが、旧制の大学院特別研究生の方々と共に、研究室（旧法文ビル三階の書庫）に専用の机と椅子を与えられたのである。これは私にとっては僥倖であったというべきだろう。

当時の私といえば、欠乏と彷徨の青春の中にあって、やたら現実政治のありように苛立っており、それを正すためには政治のことをもっと勉強しなければならぬと考えていただけであって、学問に打ち込もうという姿勢にはほど遠かったのである。研究室に残ってからほどなく、教職員組合の仕事を次々と引き受けていったのも、そのためにほかならなかった。そんな私が、いささかなりとも学問らしきものと向き合う意志を持ちはじめたのは、やはり諸先生はじめ諸学兄との研究室生活に負うところが大きかったのであった。

『政治研究』の創刊号が出されたのは、一九五三年の二月である。その直後の四月に初めてそれを手にして、繰り返し読んだ時のことは今でも記憶にある。今中先生の御論文は、学部での講義ならびに『政治学序説』の主題の延長上にあって、歴史を動かす力に私の目を向けさせるきっかけになったし、竹原先生の御論考は、マルクス主義理論の動向への関心を掻き立てさせるものであった。もともとマルクス主義への強い関心があるところへ、このお二人の先生の論考に接することが、研究室生活の第一歩となったのであるから、その先への道は自ずと明らかであった。

ただ私の研究テーマは、指導教授が具島先生だったということもあり、政治史専攻ということで、具島ゼミ（戦後政治がテーマ）に触発されての現代アメリカ政治史であった。しかし政治史研究ということであればなおのこと、研究活動は丹念で緻密な作業の積み重ねが必要である。だが私はそれに徹することが出来なかった。時代の雰囲気があったとはいえ、忸怩たるものを禁じえない。若気の至りといえばそれまでだが、私は早くも助手になったその年の秋には、日本政治学会で研究報告を行い、翌一九五四年春には『ファシズムと軍事国家』（勁草書房）に論文を発表し、つづいて『政治研究』第三号にも拙稿を掲載した。しかしその内容の杜撰さは思い出すだけでも汗顔の至りである。

この『政治研究』の編集や刊行作業は、研究室の若手メンバーでやっていたわけだが、何時頃から私がその主たる担い手になったのかは定かではない。ただ第五号には「政治研究会報告」が載せられているが、その原稿は私が作成したような気がする。今これを見てみると、一九五五年度には一一回、同五六年度には六回の研究会が開かれている。私はその計一七回のうち一回だけは欠席しているが計五回の報告を行っており、内容はともかく研究会活動には積極的だったことが推定される。

今振り返ると、その頃の研究会は活発そのものであった。なにしろいずれ劣らぬ論客ぞろいで、しかもその意気だけは軒昂たるものがあったからである。その気負いの背後には、九大政治研究室が中心となった『政治学講座』（理論社）刊行の余波もあったのかもしれない。私の場合にはさらに経済学部や文学部の若手研究者との研究会が、それに輪をかけていた。組合運動と研究会活動、その熱気の中から、ほどなく私は一九五七年の春には教養部へと転出する。

思えば、時代もそして政治学それ自体もまだ混沌としていた。その中でただ確かだったのは、戦争の歴史を二度と繰り返してはならぬ、政治の研究はその対象が何であれこのことの自覚を欠いてはならないという共通の認識であった。そしてその自意識が研究そのものに先行しがちであったこともまた、否定できない事実であった。

少なくとも私においては、政治の学における根本問題としての、事実と価値をめぐる方法上の問題を十分に自覚できないままに、なお暫くの間は『政治研究』と共に齢を重ねていったというほかはない。その歴史は、私にとっては苦渋の歴史でもあったのである。

『政治研究』第五〇号の記念に寄せて

小山　勉

『政治研究』第五〇号と知って、老いたる感性には、戦後五〇年を迎えて「戦後は終わった」としきりに言われていたことが気になる。しかし、若い研究世代を前にして、私自身は少し居直って、本号は新たな時代の真に新たなスタートだと宣言したい。「願望は大きく成果は貧困」、私自身何度経験したことか。実は、これが最も怖い。そこには努力の空振りがあり、自信喪失が決定的になりやすいからである。百も承知だろうが、多忙と混乱は最高の名誉と諦念して、不断の勝負、着実に成果を積むことを、片時も忘れないでほしい。そこに『政治研究』に応える道がある。それには先輩たちが築いてきた本紀要の高い評価レベルに耐えうる成果が必要である。この必要に応えることができなくなれば、本紀要の存在理由はなくなる。それが何よりの心配だ。余計な心配だと言う気迫があれば安心だ。

ところで、近年、専門分野の変動も〈interdisciplinary〉から〈transdisciplinary〉へと厳しい。知的アイデンティティも模索のなかでぐらつくだろうが、〈libre examen〉を発揮して、新しい挑戦的成果が『政治研究』に次々に掲載されるのを期待している。そのためには、競い合いの開かれた研究交流の環境が必要だろう。

最近、技術知の全能化が進行している。大学はミネルヴァのふくろうが住みにくい森になりつつある。これは知の環境破壊ではないかと危惧される。学術的研究の継続とその成果の発表がますます困難になってきている。このような傾向は、とくに若い研究者には厳しいだろう。これに耐え抜くには、どうしても『政治研究』のような学術性の高い紀要が必要である。これに関わる者が相互に当事者として実践的英知を絞り合ってほしい。

知のエンターテインメント化が学術的研究にも及んで、最近増えつつあるレジュメ論文も私の目には気になる。知の系統樹の幹細りのせいではないかと心配だ。古典や歴史の素養の貧困か、某著作集などをじっくり読んで〈thought AND humanity〉に触れる日常が少なくなっているのだろうか。これは反故世代の軟弱無為な懸念かもしれない。

最後に、『政治研究』にスタッフの論文掲載がもっとあっていいのではないか。一三年の在職で私自身、「トクヴィルと一八四八年」（第三三号）を一回掲載しただけであるから、これは反省的願望である。本紀要が大学院生と助手の発表誌と特定視されるのは、評価レベルの面で再考に値しないか。そのレベルアップのために一助となればというのが、当時の私の単純な動機であった。

『政治研究』が高い評価を受け、とくに若い研究者の輩出を促す紀要として絶えず工夫が考案されていくことを期待している。

二〇〇二年十二月二十四日記